

智証大師と中国の書

八 木 宣 諦

一

智証大師（円珍）は入唐によって四百四十一部一千卷の經典章疏をもたらし、精神的文化的に大きな功績を遺した。また円珍に関連する多くの書跡類を遺す結果にもなった。総計で六十三点が知られている。仏教資料としてばかりでなく、同時代の数少い中国書跡をも含んでいて書法研究に極めて重要な資料となっている。何にもまして円珍自身の生涯の書の変化が極めて明了にわかるのである。円珍の書は従来、晩年の独特な筆法の自筆消息だけがとり上げられている傾向があるが、在唐中と帰朝後に分けてみると様々な書風のものがみられる。

円珍が最澄に倣って、中国のどのような書法資料を将来したかを探り、円珍自筆の書跡を分析していくことによって、中国書法との関連から円珍の様々な書風形成について考察してゆきたいと思う。

二

最澄の書は請来目録によると、中国書法として趙模千字文、智永千字文、王羲之草書十七帖、王献之書法、集字聖教序の他、唐代の歐陽詢書法等が録されていて、正倉院文書にみられる当時のオーソドックスな中国書法の手本となるものがもたらされ、最澄自身もそういうものを習われたであろうことが、久隔帖その他の書跡によって了解される。

さて円珍に於ても、五種の請来目録を遺して中国書法の資料が録されているから、中国書法との関連を知る第一の資料といえる。

円珍（八一四―八九一）は入唐に際し、最澄の台州明州公驗の写しを作ったり、嘉祥二年に叙された伝燈大法師位記を、翌年改めて当時著名な書家の藤原関雄に依頼して綾絹に書いてもらったり、帰朝後、書家の時原春風に太政官公驗牒（八六六）を書いてもらうなど、円珍が能書に関心を示していた

ことが窺える。円珍の書は細い行書が多いことから、入唐前には主羲之書の流行を背景にした最澄の行書に似た書を書いていたと思われる。

ここで『行歴抄』によって中国の巡錫地と年代、更に取得した碑銘目によって在唐中の円珍書の成立背景を探ってみたいと思う。

円珍が欽良暉の貿易船で中国へ出航し、大中七年（八五三）八月十五日に福州に上陸し温州台州をへて十二月天台山に到る間に取得した書法類をあげると。福州開元寺新造浮屠碑、開元寺造浄土写一切経並藏碣銘、修習道場碑、仏隴禪林寺碑、天台大師金光明齊碑、越州孟中承修理石象道場碑、天興寺法華院故二大德比丘尼碑、南嶽思大師碑、智者大師碑、大辨正広智三藏國師碑（不空碑）、伝法堂碑、薦福寺臨壇大戒德律師碑、大律故懷道闍梨碑、大唐左街重建寺碑などである。書法上特別重要なものはないが、長安にある不空碑等は拓本がもたらされたものであろう。

大中八年（八五四）九月国清寺を發つて越州、揚州、汴州、洛陽をへて大中九年五月長安に到着。ここで円仁の師でもあった法全（フツケン）とめぐり会い円覚とも会った。青竜寺や竜興寺に滞在している。十一月下旬出發迄の七ヶ月間に求法した寺は、大興善寺、慈恩寺、薦福寺、崇福寺、興福寺、千福寺、莊嚴寺だった。大興善寺では、不空法孫の智慧輪三藏にもめぐり

会った。長安は書道のメッカとして盛えたが、青竜寺求法目録は付法伝授が目的の為書法関係の記載はなく、後の国清寺外諸寺求法惣目録に収められている。大中九年十一月長安を發ち、洛陽には一ヶ月滞在した。竜門石窟も訪ねたことであろうが、造像の拓本取得はみられない。

洛陽を發つて大中十年（八五六）六月国清寺に帰着。十二年六月日本に向け出航する迄台州の地で求法し、国清寺には前後二年間滞在した。国清寺求法目録には長安で所得の密教関係の法門、圖像、福州温州台州越州で得た聖教と共に碑銘も収録されている。前のと重複もあるので新たなものをあげると、国清寺律大德舉大師碑、達磨和上碑、祭禪師碑、杜正倫送双鋒山信禪師碑、蘄州忍禪師碑、荊州玉泉寺大通和尚碑、能禪師碑、西明寺故大德宣公律院碑、泗州普光寺碑等である。造寺碑、僧の墓碑の多いのが注目される。禪関係の碑も多い。全文は清朝に最も多く編纂された石刻史料文献によるわけだが、大通碑など二三が載るのみで、碑が後に散佚したものとみえ収載されていない。将来された拓本が現存しないので書風等の詳細は知り得ない。

そこで次に原本資料である円珍自筆の書跡について年代別に分析していくことにする。全文を自筆したもの、他、奥跋を追記したもの、加筆したものなどがあり、在唐中のものと帰朝後のものでは書風を異にしている。

国清寺求法目録にある日本国求法僧円珍録や国清寺外諸寺求法惣目録にある署名にみられる楷書が円珍自筆としてしられ、後者には軸木にも朱書があるという。内藤博士がかって開成石経に似た書であるとい指摘のもので、円珍にしては重厚な楷書である。

円珍の書で最も多いのが行書体で、福州温州台州求法目録は細い線の速書きの行書で全文を書いた。根底には最澄の風が感ぜられるが、筆が速い為に沈着した重厚さ静韻は感じられない。開元寺求法目録の最後の七行に円珍の筆跡がある。最澄のような端正厳格な書ではないが、速書の独特の線である。

中国では中唐に書の革新運動が起り、張旭、顔真卿が自由な氣風の書を書いた。僧門でも懷素があらわれ狂草を書いた。細い線の躍動する書で、懷素の書が僧門間に流行し唐末には聳光、貫休、亜棲などの書僧が輩出した。円珍の書も恐らくは懷素の細い線の書風、或は自由奔放に書いていく当時の時代背景の影響があったのではないかと思う。

円珍文書によって中唐以後に行われた唐の書風をみていく。青竜寺求法目録は法全のもとで求得した密教經典を記録したもので、卷末に授法の師法全が、胎藏界、金剛界法と曼荼羅や法門を授与し、最上乘に精通するにいたったから有縁の衆生を利益し、別離の後、再び淨土にまみえんことを自書

している。十五行にわたり謹嚴な行書体で書いている。左傾の癖があり、細い線乍ら骨気ある書き振りであって、求心的な書風である。字間をつめた書き方など円珍の書に類似点がかなりみられる。恐らくは尊崇する師の書風として受容されたものと思われる。自筆本円珍疑問にも法全風の書き方が踏襲されている。また帰朝後の円珍請伝法公驗奏法案も細い線の行書のこの書風の系統とみられるが、日本で書いた為か幾分骨気が弱くなっている。

この他中国の同時代資料としては、関所を通る過所の類がある。内藤博士が早くに注目された。潼関を通過する為の越州都督府過所と蒲関を通過する為の尚書省司門過所で、実物として現存する唯一のもの。当時の役人の書跡である。円珍台州公驗請法案は最澄が刺史の陸淳や鄭審則から証明を得た例にならない、円珍が台州刺史に公驗を求めたもので、これに刺史嚴修睦の証明が八行に重厚な楷書で書かれている。大中十二年頃の上級役人の筆跡である。請台州公驗牒案は帰国に際し台州刺史に公驗を下附せられんことを願ひ出たもので、小楷で四紙に丁寧な書かれている。

これら役人の書のほかに、円珍が帰朝の時、唐人から贈られた詩や書状を二巻にした唐人送別詩并尺牘も中国書の資料である。詩のほかに種々の内容がこめられ書風も様々だが、当時一般の書の水準を示している。

円珍はこれら中国人の書を過眼し、自らも多くの書跡を遺したのである。

円珍は自筆文書のほかに、署名、加筆、追記したものがあり二十点を数える。これも年代によって各々書風を異にしている。金光經文句中下、縁生論、大毗盧遮那成仏經卷四など是在唐中に加筆追記したもの。太政官牒案（八七二）は最澄以下円仁、安慧、慧亮に至って密教が弘まり、円珍が円仁、入唐して法全から法を学んだ次第を述べ、阿闍梨位を得るに官に奏聞して宜旨を蒙って授けることを述べたもので、終りに六行の円珍の追記がある。自由奔放な行書で書いているが、円珍疑問書写本（八八二）巻末の追記は内容の上からか、謹嚴な細い行書である。三弥勤經疏の円珍追記（七七才）は晩年の消息にある枯樹のような筆致である。

ここで全文を自筆のものについて考察を進めたい。全文自筆のものは福州温州台州求法目録以外はほとんど帰朝後に成立のもので、最澄書の宗風を維持したものから、在唐中過眼した中国人の書法等が混成した書風のもの、更に日本的な流麗さの加わったいわゆる和様のきざしのものなど様々な書風である。

年代的にそれらを概観していくと、先ず自筆本円珍請伝法公驗奏状案は前に記した通り細い行書の書風である。

文書目録（八七四）は二十行にわたり文書の目録を記した円

珍の自筆本であるが、細い線のやわらかい草書で書かれている。懷素の自叙帖を連想させる。奔放な書き振りである。メモ的ともいえる速書で、求法目録等の書とはかなり違った趣きである。

自筆本円珍疑問は、大興善寺の智慧輪三藏に示教を仰ぐ為に密教經典儀軌中の質疑を用意したもの。多くは大日經、金剛頂經、蘇悉地など密教經典の釈義、読み方の疑問であるが平易な問題も入っている。細書きの謹嚴な行書で中国風な福州温州台州目録の書に連なるものだが、字形縦長にして骨気を強めて書いているのは内容によるものと思う。成立は元慶年間、円珍七十才前後と推定されている。書写本は弟子に作らせた副本だが、末尾の伝教弟子遠塵（円珍）謹白の追記は、自筆本の書と同筆の書き方である。また、感夢記と表される中に円珍が智慧輪にあてた書状の控えがある。奥付では元慶六年（八八二）円珍六十九才の筆と伝えるが、肉太の懷抱的な行書で他の円珍の行書と書き振りを異にする。

弟子達に遺戒として伝えた制誠文は、廿一行を行書で書いたもの。円珍疑問などの骨気のある書法と違い字形が少しくずれているが、行間字間をつめた独特の趣致があり、次の病中言上書に似た書風である。病中言上書は、寺務儀式などの重要なことを病床でまとめて後事を託して書いたものと考えられ、両者共筆力が弱く同時期のものと思われる。

議定文は伝法阿闍梨が弟子の阿闍梨を持たずに死亡した時、その所有の真言法門、儀軌などを全て寺の真言蔵に納めることを弟子達に示したものの。細い線の速書の草書である。字間が詰まっているのに爽快な感じがするのは、草書という最も簡単な形の上に線の躍動感と線の清々しさにある。円珍の書は最澄のような端正な字形ではないが、線のよさが草書という形と結びついて完成した境涯であらう。在唐中の懷素系統の書をみた影響が考えられてくる。

寄遍照消息も円珍の自筆書状で、元慶寺の遍照の病氣を見舞い、あわせて元慶寺僧の処遇について意見を申し送ったものの。当時の延暦寺と元慶寺の親密な関係を示す資料である。「奉」「有」など左払いを極端に下げてゆくのは最澄の書にもあり、抛り所としたのであらう。消息で忽卒に自由に書いているから今までの色々な筆法が集約され、個性が顕著に表われているから脱俗超妙にして格調が高い書跡と評されているのである。

三

円珍が入唐に際し最澄公験の写しを作ったり、伝燈大法師位記を能書家に依頼し新たに用意したことによって書に深い関心を示されていたであろうことが推察される。一般に僧の場合是一生涯に書風を何度も変えた書き方をしないのが通例だが、円珍の書跡を在唐中と帰朝後の筆跡に分けて概観す

ると様々な書風のあることがわかる。また中国の書にかなり影響をうけていることもわかる。

円珍の書には重厚な楷書もあり、行書が最も多いが、かたい骨気のある速書の線で書いた中国風の筆致のものや、これを基にして自由に抑揚をもつて書いたものもある。人としては最澄の細い行書書風の踏襲や、法全の独特な構えの行書などの影響が看取される。

中国に於て僧門に流行した抑揚ある自由奔放に躍動する懷素の草書系の字にも興味を示したことが察せられる。

晩年これらのものが集大成されて、とくに議定文や寄遍照消息にみられる趣致の深い枯淡の線となって顕現したと考えられる。また三跡が出る以前に中国書が定着して和様のきざしがあつたことは、円珍自筆の書のほか関連文書によっても窺い知られるのである。

- 1 拙稿「智証大師の書跡」(『智証大師研究』所収)
 - 2 『石刻史料新編』(新文豐出版公司)第一輯、第三輯まで出版されている
 - 3 『書林藻鑑』卷八
 - 4 高奉、詹輔、李達、詹景全、道玄の詩。詹景全、李達、陳蒙陳泰信、僧常維、僧師靜、徐直の書狀。
 - 5 毎日新聞社『日本高僧遺墨』老卷、140頁解説(山本信吉)
 - 6 小野勝年「円珍の上智慧輪三藏書」(『竜谷史壇』7374号)
 - 7 5を参照。仁和元年(八八五)、円珍七十二才頃と推定される。
- △キーワード▽ 円珍の行書、書風、法全の書